平成 29 年度後期　基幹教育科目　スーパーグローバル大学創生支援事業

「世　界　が　仕　事　場　Ⅰ＆Ⅱ」

―　君は、世界で活躍する先輩にどんな夢を抱いたのか聞いたことがあるか？　―

本コースでは、多様な分野の第一線で活躍する講師が、人生、キャリア、グローバル人材について語る。異文化や海外体験を含む幅広い体験の意義や意味を考え、グローバル社会での生き方のヒントを得よう！詳しくは、後期基幹教育シラバスを参照のこと。

日時：水曜日 4 限（14:50–16:20）
場所：伊都キャンパス　センター2 号館 3 階 2307 教室
対象：学部生・大学院生・留学生、　言語：日本語（英語での講義も予定）
単位：全１６回２単位　(Ⅰ秋学期・Ⅱ冬学期　各８回・１単位ずつ　全コース受講を推奨)
問い合わせ：留学生センター准教授・生田博子　Email: ikuta.hiroko.953@m.kyushu-u.ac.jp

- 受講希望者は、10/11 のオリエンテーションに必ず参加すること。
- 11/1, 11/29, 12/20, 2/7 はグループディスカッション等を予定。

１０月１８日　「心はいつも、地球市民！」

長野　剛　（朝日新聞社　記者）　京都大学 B.S. M.S.

最後に仕事で海外に出たのはもう６年前。全く「世界が仕事場」ではない私ですが、いつも心は「地球市民」です。日本人も外国人もなく、ただただより多くの人々とより良い未来を共にするために、働きたい。その思いが、私がいなければ世に出なかった記事を残せてきた原動力です。旅行大好きな大学生時代から今まで、生意気でアホな私と向き合ってくれた様々な国々の素敵な人たちへの感謝を込めて、「地球市民」としての幸せをお話しします。

１０月２５日　「グローバル化時代に求められる人材」

岩本　渉　（アジア太平洋無形文化遺産研究センター　所長）

東京大学 B.A. パリ大学 D.E.A.

グローバル化に対応できる人材ということが言われて久しいが、語学が出来、コミュニケーション能力があればよいのだろうか。文化的差異の理解についてはどうなのか。またその人材は、地域社会を担う人材とは全く違う人材なのだろうか。 通算 13 年間海外で学び働いてきたが、まだ結論は出ていない。 これらについて、多文化共生や持続可能性といった事柄とも併せ考えていきたい。

---

11 月 8 日 「今、北極がアツい！」

兒玉　裕二　（国立極地研究所　北極環境研究コンソーシアム事務局長）

北海道大学 B.S. アラスカ大学 M.S. Ph.D.

北極の温暖化は地球全体と比べて約 2 倍の速さで進行している。それに伴い、夏季の北極海における海氷面積の減少、永久凍土の温度上昇や融解、氷河氷床の融解などが起こり、北極海航路の可能性の増大、生態系の変化、中緯度地帯の寒冷化や極端気象の出現、等が起こっている。北極で起こっている変化を紹介し、海外での研究活動について考える。

１１月１５日　「21 世紀のエスキモー：伝統と開発の狭間で」

生田　博子　（九州大学　准教授）

アラスカ大学 B.A. M.A. アバーディーン大学 Ph.D.

２０代半ば、東京の金融機関で働いていた私は、エスキモーと生活がしたくて人類学者になることを志し、昨年まで約２０年間、米国政府で働きながらアラスカで生活した。北極圏は、 石油など豊富な天然資源の開発が国や地域の経済を支える中、先住民族は伝統的な狩猟生活を守ろうとしている。グローバル化の進む現代社会における持続可能な社会とは何か、共に考えよう。

１１月 22 日　「イメージトレーニングのすすめ」

吉川　謙二　（アラスカ大学 教授、冒険家）

北海道大学 B.S. M.S. Ph.D.

各種スポーツにおけるイメージトレーニングは、とても重要と考えられている。人生でもイメージができているということは、準備ができている証拠。自分のやりたいことのイメージができたら、それに従順に実行すべきだ。イメージが出来ていれば半分以上は達成されたようなもの。あとは実行に移す時の恐怖心をどう処理するか？

１２月６日　「人間万事塞翁が馬的キャリア選択」

芝田　政之　（東京工業大学　局長・理事）

慶應義塾大学 B.A. ノースウエスタン大学 M.A. ハーバード大学 M.A.　文部科学省

３６年前、直感で国家公務員になりました。キャリア選択について深刻に悩む必要はないと思っています。だって人間万事塞翁が馬ですから。大切なことは、どこでも学ぶ習慣、チャレンジ精神。飾らないで自分のキャリアをお話しします（大チャレンジ）。国の施策が決まる過程をケーススタディとして裏表ご紹介します。世の中そこら中グローバルです。もちろん国家公務員の仕事も。

12 月 13 日　「地図を毎日眺めています」

木田　新一郎　（九州大学　准教授）

東京大学 B.S. マサチューセッツ工科大学 M.S. Ph.D.

私は海の研究をしているのですが、ほぼ毎日のように地図を眺めています。 地球科学の研究者は地球が研究対象なだけで世界を相手に仕事をしている、というわけではありません。でも海も広いのでいろんな国の人と協力しながらその中で起きていることを把握することになります。留学体験などを交えながら、研究者の世界ではどう地球を科学しているのか、お話ししたいと思います。

１月１０日　「グローバル・シチズンシップで繋がる未来」

辰野　まどか　（GiFT グローバル教育推進プロジェクト　事務局長）

聖心女子大学 B.A.　SIT Graduate Institute M.A.

「世界をよりよくする志」であるグローバル・シチズンシップとは？　一緒に考えていきたいと思います。また、学生時代の体験が、今の GiFT の活動に繋がっています。Comfort Zone（いつもの居心地のいい場所）から Learning Zone（成長する場所）へ。その一歩から生まれた未来について、お話しします。そして一緒に未来をイメージしてみましょう！

１月１７日　「様々な開発支援の形：支援を担う人をサポートする」

稲村　次郎（九州大学　特任教授）　早稲田大学 B.S.　国際協力機構(JICA)

開発途上国を支援すると聞くと、国連を始めとする国際機関や様々な分野で活動する NGO を思い浮かべることが多いと思います。そのイメージと裏腹に、開発支援の現場では、様々なキャリアを持った方が、民間企業、地方自治体、青年海外協力隊といった様々な組織に所属しながら、ご自身の専門性を生かしながら活動をしています。様々な協力のうち、日本の政府開発援助の現場でどのような方が働いているかを紹介し、様々なキャリアが国際協力につながることをお話ししたいと思います。

１月２４日　「途上国・紛争地の子どもに教育を：現場の実践と研究を架橋する」

小松　太郎　（上智大学　教授）

上智大学 B.A. ロンドン大学 M.A. ミネソタ大学 Ph.D.

世界で教育を受けていない子どもたちは 6000 万人、その半数は紛争に影響を受けた社会に住んでいます。彼らの教育機会を保障するために、私は、政府系援助機関（JICA）、国連専門機関（UNESCO）、紛争地での国連ミッション（UNMIK）などに勤務しました。 多様な世界を「肌で」知ることは大切であり、それは自身の生き方を見つめる貴重な機会ともなり得ます。

１月３１日　「グローバル社会って一体何だろう」

島津　正數　　修猷館高校卒業、九州大学 B.A.

３６年前、企業の一社員としてシンガポール政府との合弁企業に出向し、競争力を高める国の戦略を民間企業の立場から学んだ。その後、復職し、企業、私立大学、ユネスコ・アジア文化センターでの業務を通じて、企業の発展、持続可能な社会の実現に向けて働いている人々を見てきた。グローバル社会とは一体何だろうか、世界が求めている人財、日本が求めている人財とは一体何だろうか、日本は「特殊な国」になっていないだろうか、私が感じていることをお話ししたい。